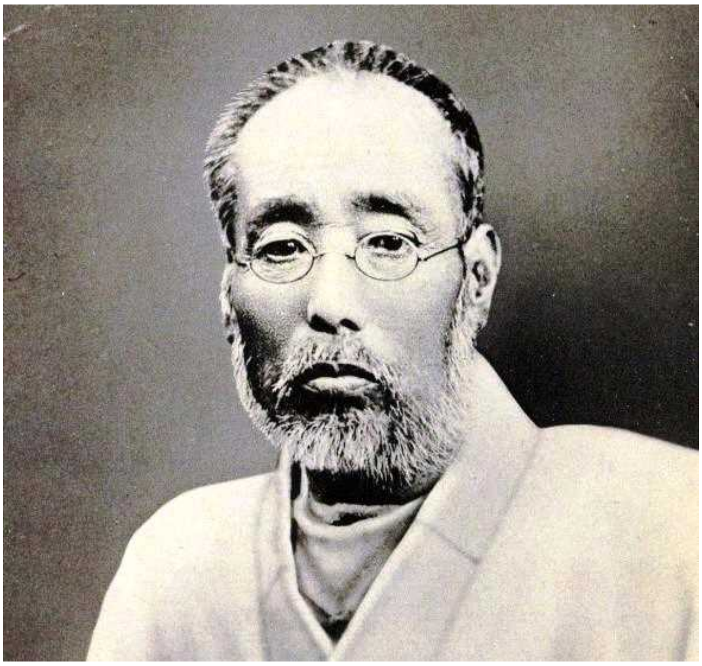
# 予想と想定

## オペラは楽しむだけで良いのか？

2023/02/18



中江兆民　1847（弘化4年）- 1901（明治34年）

### 政府と政治家批判

ある日の朝日新聞の朝刊のコラムに、霊長類学者の山極寿一さんが、「科学者は過去の事例から大津波を予想していたし、原発事故がどういう被害を及ぼすかも算定していた。それを想定しなかったのは政府の責任である。新型コロナウイルスでも同じ間違いが起きた」と政府批判をしています。なるほど。このコラムで私たちは、「予想」（予測: prediction と算定: estimate)と「想定」（assumption）の意味の違いを知ることといつもこの二つの言葉を区別することの大切さを学びました。

また、別の日の朝日のコラムで、憲法学者の蟻川恒正さんは、安倍晋三元総理の暗殺の動機がある教団との関係が選挙支援にあったことを述べて、政治家たちの選挙至上主義を批判しています。この政治家たちの選挙至上主義は「内輪の感覚」であり、その感覚がそのまま政治家以外の人にも通じて同然だとする「外部感覚」の欠如である。その原因は、「想像力の貧困」であるとしています。ここでは、政治家たちは、「内輪の感覚」と「外部感覚の欠如」と「想像力の貧困」という一連の意識の流れを批難されます。ここにも「予想と想定」の必要が説かれています。

また、別の日の朝日のコラムで、医療人類学者(と言うのがあるんだ)の磯野真穂さんが、「社会を覆う『正しさ』」について論陣を張っていました。「ここ数年、日本は新型コロナ感染のリスク管理を徹底的に追求する社会になってしまった」と国家の対応を批判しています。そのおかげで、社会に差別や中傷やバッシングが生じて、ある階級の人々への排除が生まれたのです。群れて騒ぐ若者たちや夜の街に集う人たちが秩序を乱すとして排斥されました。自治体が自粛要請に従わないパチンコ店を公表すると抗議や脅迫が殺到してほぼすべてのお店が閉店しまいました。「これらの人々は個々人が普段から抱く秩序を乱す者を排除したいという感覚が拍車をかけた」と磯野さんはいいます。それで、ゼロリスクの道徳が、「秩序を乱す集団」を仲間はずれにし、さらには、日々、感染者と接しなければならない医療従事者に感謝の言葉をかけながらも、「私のテリトリーには入らないで下さい」と感染リスクの高い人や集団を外へと追いやるのです。そして、「感染症の拡大を抑止するのか、それとも経済的なダメージを低減することを優先するのか。こう語られますが、私は、命か経済かではなく、命と命の問題だと考えます。感染症による死も、生活苦による自殺や病死も同じく命の問題です。『命か、経済か』でトレードオフできる問題ではない」と言い切ります。まさに、そうです。「予想と想定」です。

## 中江兆民の「東洋自由新聞」

新聞が報じた社会と政治に関する最近の話題を三つ、ご紹介しました。新聞が、政治に関して堂々と意見を述べたのは、古くは、中江兆民の「東洋自由新聞」が始まりでしょう。明治期の最大のジャーナリスト中江兆民は、新しくできる明治新政府に対して、民間の立場から、「自由・民権」を説くために自ら「東洋自由新聞社」を起こします。これは、明治１４年、西暦で 1881 年のことです。いまから 140 年ほども前のことです。この年の 10 月 12 日に、明治天皇が「国会開設の詔」(こっかいかいせつのみことのり)を出して、1890 年（明治 23 年）を期して議員を召して国会(議会)を開設し欽定憲法を定めることなどを表明しました。この期や善しと、前もって兆民は西園寺公望を社長にして、自らは主筆を務めて新聞を発刊し、「発行第 1 号」に兆民は社説を書いて載せました。

われわれがこの新聞を発行するのは、まさに、日本国三千五百万の兄弟とともに、向上の真理を探求して、国家にむくいようと欲するものである。つまり、普通の新聞に書かれている事件に先立って、順次われわれの見解を述べ、ひろくその可否を天下の君子に問おうとする。そのおもなものをあげておくと、つぎの数項目につきる。すなわち、自由の説、君民共治の説、地方分権の説、外交一平和の説、そして教育、経済、法律、貿易、兵制である。もちろんこれは、一朝一夕で論じつくすことはできない。まさしく、日月をかけてはじめて、どうにか論じつくすことができるものである。【第1号　明治14年(1881 年)3月18日】

凄いですね。この新聞で、兆民は、国家を説くに、「自由」に始まって、「君民共治」(立憲君主制)で政体を示し、外交から、平和から、教育から、経済から、兵制まで、ありとあらゆる政治の体制について論じました。兆民は、まだ国会も開かれない前に、まだ選挙もおこなわれない前に、新しい日本について「予想」しているのです。

## ルソーの自由民権思想を流布

そして、兆民は、矢継ぎ早に社説を書いて、国会と内閣と人民と世論と憲法と代議士と官吏(役人)と天子(天皇)と新聞記者の役割を次々と「想定」しているのです。さすが、愛国者の兆民であり、わが国における最も偉大な啓蒙思想家の兆民です。大久保利通に日参して政府留学生に選ばれてフランスへ行き、当地でルソーの政治思想に強く引かれて、帰国後、ルソーの『社会契約説』を分かり易い丁寧な訳文で紹介した仮名交じり体の『民約論』を編んで発表しました。ついで兆民は、流麗な漢文でより詳しくルソーの『社会契約

説』を解説した『民約訳解』(1882:第2編第6章までの漢訳) を出版しました。さらに兆民は、そのルソーの政治思想を新聞でも説いて、世間に「自由民権思想」の大切さを知らしめたのです。その内容は、まさに感動的なもので、熊本県出身の自由民権運動家宮崎八郎が感激して漢詩で歌った「泣いて読むルソー民約論」です。

国に一定の憲法があり、国会が設立されていれば、人民は一票を投じて代議士を選出して議院におくりこみ、議員は官吏を選び、その官吏が政府に入って天子をたすけて、政治を行なうようにさせる。そのときなら、議員はかならず人民が敬重して政治をまかせるのである。官吏は、かならず、議会に尊敬されて信頼をうけるのである。議員が人民をはなれて独立せず、官吏は議会をほったらかして専制をしかず、官民がともに手をとりあい、心をあわせて、すこしもそのあいだをさまたげることはない。釈迦の教えにいう、二つの鏡がたがいに映りあって、かげがないといったものだ。

欧米の諸国の政治は、だいたいこうなっている。世論が議会に注ぎこまれ、議会での論議が内閣に注ぎこまれるのは、もちろんのことであり、政府は場合によっては、ただちに世論を採用して自分の参考にすることもたびたびであり、小さいことも大きいことも、ひとつとして人民の意志から出ないものはない。

こういう場合なら、わたしたち新聞記者は、つとめて人民の輿論(よろん)を採用して紙上にかかげ、代議士や政府をみちびき、啓蒙することが、求められるべきである。ああ、憲法がまだできず、国会がまだ設立されていないわが国では、死生、禍福、さらには自分の家のことであっても、人民たるものは、論じても君の益にすることなどできることではない。つまり、憲法がまだできず、国会がまだ設立されていない国の人民は、民ではないのである。一群の鹿に過ぎない。人ではなく、ひとかたまりの血と肉だけだ。われわれ人民は、ただまさしく、すみやかに其の民となり、真の人となることを目的とするべきのみだ。これを考えずに、ただ時事を論じたがるものは、孟子がそうした人たちをあざけったのを聞くがいい、「猶(なお)、木に縁(よ)って魚を求むるものなり」(木にのぼって魚をとろうとするようなものだ)。

【第12号 明治14年(1881 年)4月3日】

兆民はこのようにして、国家は「人民」が主であることを諄々として説きました。このような人民たちは、国会開設と選挙を心待ちにしました。

## 愉快なオペレッタ《メリー・ウィドウ》と貴賤結婚問題

では、演劇やオペラは、政治的、社会的なことをあつかうだけで、芸術として楽しんだり、喜んだりしてはいけないものなのでしょうか? いえ、いえ、そんなことはありません。例えば、オペラでも、オペレッタという愉快なものがあります。《メリー・ウィドウ》(1905)などは、甘いメリー・ウィドウ・ワルツがあって、きれいなヒロインが民族衣装を着て歌う「ヴィリヤの歌」があって、二重唱の「お馬鹿な騎士さん」や役人たちが歌う「女、女、女のマーチ」があり、最後には楽しいカンカン踊りもあります。全編、楽しめます。これぞ、オペラの楽しさです。ヒトラーも愛したほどの誰でも楽しめるオペレッタです。充分楽しんだあとで、ふと考えてみると、物語は当時の社会的な問題「貴賤結婚」なのでした。貴族の息子ダニロと落ちぶれた地主の娘ハンナは愛し合い、結婚まで誓ったのですが身分があいません。親や親族に反対され、貴賤結婚を禁じる法律もあって、結局は別れることになりました。でも、オペレッタはハッピー・エンディングを喜びます。ダニロと結婚出来なくなったハンナは、大金持ちの老人にみそめられて結婚します。その夫が急になくなって、ハンナは莫大な遺産を相続して、国一番の財産家と成ります。ハンナの身分はダニロ以上になりました。今度は、ダニロの分が悪くなります。あとは作者の腕次第。すべての問題が解決されて、二人は結婚します。めでたし、めでたしです。でも、結局は、この楽しいオペレッタ《メリー・ウィドウ》でも、その主題は、深刻な社会的問題「貴賤結婚」

の是非(ぜひ)が問われていたのです。作曲者レハール(1870-1948)　が活躍した20世紀初めの「銀の時代」のオペレッタのほとんどは、「身分違いの恋」、すなわち、「貴賎結婚」が主題だったのです。深刻な社会的な問題と底抜けに明るいオペレッタとは、それがハッピー・エンディングで終わるにしろ、破局の悲劇に終わるにしろ、実は、深く結びついていたのです。やはり、大勢の市民たちが集まる舞台芸術は、政治や社会との因襲からは抜け出せないのです。

このように、２０世紀や２１世紀のオペラやオペレッタは、常に政治や社会と関係づけられて上演され、論じられることになりました。でも、オペラなどの舞台芸術は、「ただ、楽しむだけでいいのではないか」　―　と言う声が講座のあちらこちらから聞こえます。そうです、劇場はただ、市民に快楽を与えるためにあるのですから、当然です。

## 快楽は一生の目的ではない

そこでまた、兆民の出番です。彼の「東洋自由新聞」の社説に、「井上参議の演説は一時の謬伝(びゅうでん:証拠のない間違った報道)に過ぎず」というのがあります。この井上参議とは、政府の要職を歴任した井上馨(かおる)のことです。ある宴会で、井上が話した内容が新聞に載りました。その発言を、兆民が批難したのです。

われわれは一昨日の(明治十四年四月)十三日、新聞として先輩にあたる『曙新聞』で、井上馨参議が山梨で、県令(県知事)、書記官や県会議員、郡長たちと宴会でうちとけて話したことばを読み、また、『峡中新報』の今月九日号で読んで、その詳細を知ることができた。この報道はまちがいにちがいない。だんじて井上参議はこんなことをいうはずがないのである。参議はいったという。「あなたがた〔県令以下同席した人〕は社会の上流者であり、上下の模範ともなっているのだから、何事も、快楽をえて一生をおえられんことを望む。造物主が人をつくったのも、目的は快楽をあたえるためである。云々」と。ああ、こんなことを井上参議がいうはずがあろうか。人生の目的が快楽だとギリシアのアリスチポス(ソクラテスの弟子、快楽主義者)やエピキュロスの説であり、これを説明するだけでも目がけがれ、書物をけがすものだ。参議はこんなことをいうわけがない。天が人をつくったのは、自分自身の快楽をえさしめんとしただけであろうか。ちがう。おのおのがその職務にしたがい、能力にしたがって勤勉につとめ、道に合うようにさせようとしたのである。行が道に合致すれば福祉は求めないでもやってくる。
【第21号　明治14年(1881 年)4月15日】

もし、人がそれぞれ自分の快楽をうることだけを目的とし、他をかえりみなければ、害はいうをまたないだろう。小人がばくちをし、酒を飲むのは快楽をとるためであり、「東どなりの家の墻をこえてその家の処女を懐く」(『孟子』)のは快楽をとるためである。「筐(はこ)を胠(ひら)いて」(こそどろをし)壁を穿(うが)って盗むのは、快楽をとるためである。人を殺して奪うのも同じことだ。君子が公事を怠って私利をいとなむのも、権力をかさにきて威を行ない、わいろを要求するのも、文章をあやつって人をそしるのも、こびへつらうのも、主君をかばうのも、法律をまげて他人の利を奪うのも、みな快楽を求めるためである。道義をかえりみずに快楽だけを求めれば、弊害はその極に達するであろう。こうしたことを参議がいうはずがあろうか。【同】

むろん井上馨は、確かにこのような「快楽論」を述べたのでしょうし、それも、宴を賑わすうためにオフレコで言ったことが新聞に載ったのでしょう。運が悪かったのです。兆民は待ってましたとばかり、井上参議をはじめ、議員や役人の襟を正そうとこの「予想」の一文を書いたのです。議員や役人が道義を捨てて快楽に身を墜(お)とせば世の中の道義は廃(すた)ります。だからと言って、この兆民の説から一直線に、私はみなさまに、「オペラやオペレッタに快楽を求めてはならない」と言うつもりはありません。みなさまは、お金を払って、家族や友人や仲間たちと、オペラやオペレッタに、快楽や娯楽や憂さ晴らし

や楽しみを求めても良いのです。しかし、そのときに、作家や作曲家や劇場支配人やスポンサーたちがなにを考えてこのオペラやオペレッタを「当時の観客である人民」に向かって上演したのかに対して、果敢(かかん)に「想像力」を働かせることが必要だと言いたいだけなのです。私たちが生きているこの時代は、なんでもありの「狂気の時代」であるのですから。

## 狂気の時代のシェイクスピアと私たち

舞台芸術といえば、演劇です。演劇と言えばシェイクスピアです ― と一気にシェイクスピアに飛びます。シェイクスピアの戯曲は、悲劇も、喜劇も、どれもこれも、彼の当時の政治を題材にしたものばかりです。ポーランドの政治活動家で演劇理論家ヤン・コットは、その著『シェイクスピアはわれらの同時代人』(1961)で次のように言っています。

ここ（1960年頃のポーランド）では、あらゆる感情の上に政治が影を落としている。誰もそれからのがれることはできないのだ。すべての人間が政治に毒されている ― これは一種の狂気だと言うほかはない。

エリザベス女王の時代の１７世紀初頭に生きたシェイクスピアもまた、２０世紀中頃のポーランドの作家や演出家や俳優と同じように、狂気の時代の演劇関係者でした。「現代」のことを英語では、「モダーン」（modern）とも「コンテンポラリー」（contemporary）ともいいます。「modern」とは「モード」（mode：流行）のことです。「contemporary」とは、「temp=時を con-=合わせる」で「同時代」を意味します。それで、ヤン・コットは「現代人である私たちは、シェイクスピアと同時代人である」と定義付けるのです。したがって、舞台芸術が流行る現代も、そして、それを観る現代人である私たちも、「シェイクスピアと同じ狂気の時代に生きる観客だ」というのです。 【このことは別項「オペラ三つの時代」で述べました】 そうであるならば、また、「予想と想定」に話を戻して、オペラやオペレッタが、時代を「予想」したものであることを知って、常に、時代の狂気を「想定」しておくことが必要です。バッハも、ワーグナーも、私たちと同時代人です。バッハの「マタイ受難曲」も、ワーグナーの《マイスタージンガー》も、狂気の時代を予想したものです。裏切りと磔刑(たっけい:はりつけの刑)のイエスの受難を「予想」した宗教曲から、覇権主義と戦争を「想定」することは容易です。また、ニュルンベルクという斜陽の大都市の崩壊を「予想」した楽劇から、社会の分裂と経済の大暴落を「想定」することもまた、容易です。そして、オペラとオペレッタは、私たちにある種の「人民としての覚悟」を迫るのです。これこそ、新しい人民自らが、自身を「想定」することです。

## 「禁欲」について

ここでまた、一つのコラムに行き当たりました。「快楽」に対する言葉「禁欲」についてです。古くは岩波書店の雑誌「図書」(1991年2月号)に載った社会学者阿部謹也の「広辞苑と私 ― 禁欲考」です。少し長いのですが、引用してみます。(傍線は都築)

例えば「禁欲」という言葉をひいてみると、広辞苑では「人間の欲望、ことに性欲を禁じ、抑えること」とある。ところがドイツの辞書ドゥーデンでは“Askese”を「（＝訓練、生活様式）倫理的、宗教的目的を達成するために厳しい抑制的暮らしを営むこと」とある。ドゥーデンにおいてはギリシア語の“askesis，Übung”訓練という意味が最初にあげられている。欲望を抑えるという意味は二次的なものであって、なんらかの目的のために鍛錬することを意味していたのである。

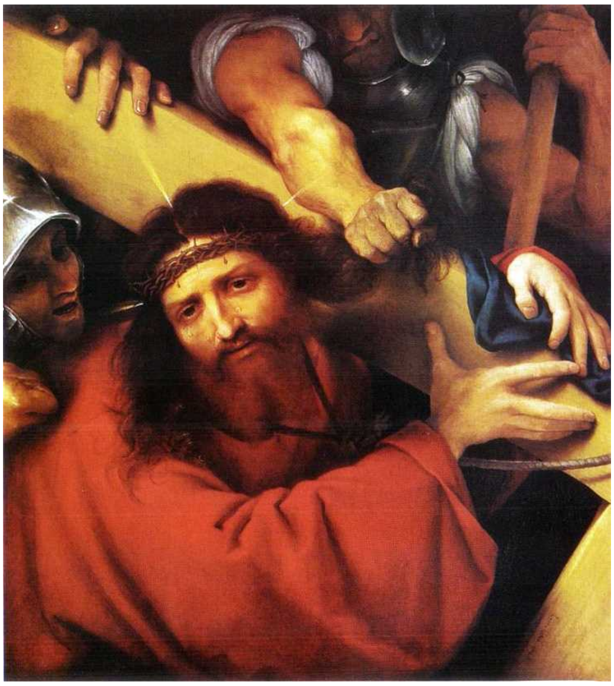
その結果として欲望が抑えられる状態が示されていた。ところが日本の辞書ではその意味は全く無視され、ただ欲望を抑えることとされているのである。このことは日本における世

間が禁欲という訳語を採用したとき、"Askese" の本来の意味を捨てることによって日本文化に当てはめようとしたことを物語っている。 "Askese" は 欲望を抑えることではない。人間が現世における快楽よりも 来世におけるより大きな幸せを得たいなどという途方もない欲望 を抱いたとき、現世の欲望がけちくさく見え、より大きな欲望のために より小さな欲望が抑圧される状態 をいうのである。来世の救いを求める心も欲望に他ならない。したがって禁欲的生活をおくるということは 来世での救いを得たいという途方もない欲望にとらわれた状態 をいうのである。 禁欲という訳語は明治以降の日本の政治社会的風土に合わせて作られたのではないかと思われる。

なるほど、「禁欲」とは、西欧では、喜びや楽しみである「快楽＝欲望」をただ単に抑えることではなく、倫理的で宗教的な目標を達するためにする「訓練＝鍛錬」なのです。先に述べた、「オペラとオペレッタは、私たちにある種の『人民としての覚悟』を迫る」とはこのことだったのです。より良き社会を作るための精神の「訓練＝鍛錬」だったのです。「鍛錬」と言えば宮本武蔵が次のようにいっています ― 「千日(せんじつ)の稽古をもって鍛(たん)となし、 万日 (まんじつ)の稽古をもって錬(れん)となす」。大変なことなのです。オペラとオペレッタに快楽を求めて楽しむとき、快楽と同時に、禁欲も働くのです。オペラとオペレッタを楽しむとき、「努々(「ゆめゆめ」と読みます)、禁欲も忘れてはなりませんぞ！」 ― と我らと同時代の演出家たちはいうのです。なるほど。

でも、なんだかそんなややこしい鑑賞法はいやですね。

【都築正道】



Lorenzo Lotto "Cristo portacroce" 1526